

<32>

福村 俊治

「環境共生型」の豊かな島であったという。しかし、その建築文化念ながら戦後伝承されることはなかつた。

米軍占領下では、新しい理念による計画的な建築づくりや街づくりもできず、ただ開放

して今、子孫に残すべき社会資本として、多大な労力と資金で建設されたわたしたちの住む街に、今なお多くの住宅・都市・交通・景観問題や建物そのもの問題が解決されず

後追い整備の結果

豊かな島はどこに人間の長年の営みは文化や歴史として蓄積され、そして最終的に街や都市として「形」になる。ローマやパリの街はその都市の文化や歴史を美しく体現している顕著な例であり、

世界のどの街も地域の文化や歴史を表していると考えていい。

わたしたちの住む沖縄は、祖先が長年かけて造り上げた建築や街のすべてを沖縄戦で失った。古文書によると、沖縄のかつての建物や街は亜熱帯島じよ地域の気候風土を生かしたものである(下図参照)。

海が埋められ、山が削られ、豊かな自然を壊しながら都市は拡大し続けたのである(下図参照)。

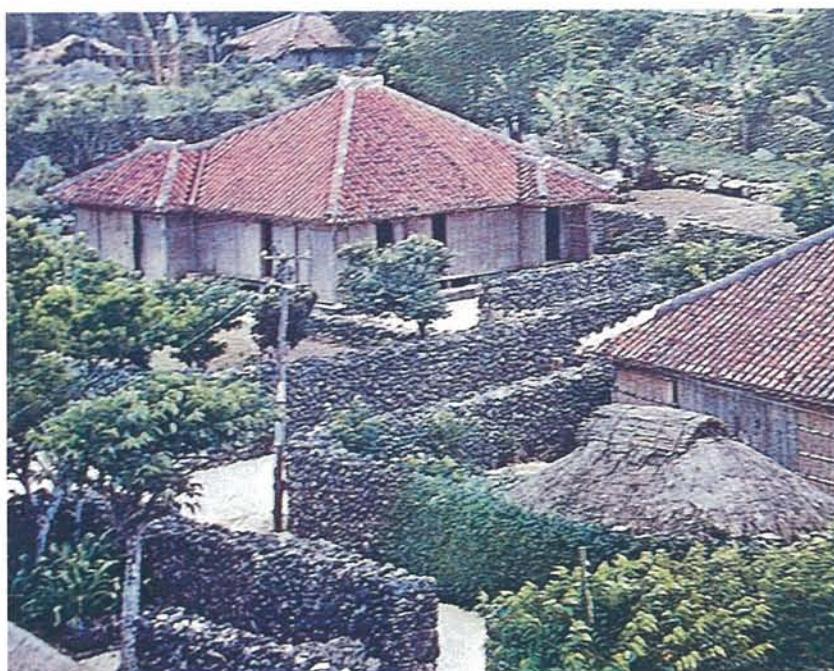
まちは歴史の蓄積

沖縄独自の建築・街づくりが課題

また、最近、大きな問題となっているのは、半永久的に耐久性があるとされたコンクリート建物の構造そのものが二十・三十年で劣化し、耐久性がなくなり、身近な住宅や学校を建て替えるを得ないケースが増えていることである。

ヨーロッパの都市の多くは厳しい都市計画の下で街が計画的につくられてきた。しかも建物も厳しい規制の下で建設され、街並みへ

環境を考える時代



▲赤瓦やヒンブンなど懐かしさを覚える風景
◀現在の市街地。無秩序に都市化が進む



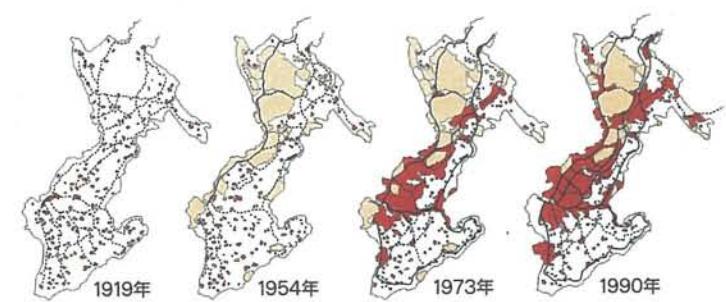
今、沖縄では、戦後建設された建物の建て替えが急速に増えていく。街づくりや建築づくりにおいても「スクランブル・アンド・ビルド」の時代は終わり、環境保全・省エネ・長期利用を考える時代となつてきている。沖縄においては広大な米軍基地

(チーム・ドリーム代表) 次回は、老朽化した団地再生の現状を取り上げる。

つまり、街づくりににおいては個人の自由よりも社会性が優先し、内外装の改装や手入れをして日本の建物よりもはるかに長く使用するのである。

つまり、街づくりにおける歴史・文化・芸能が子孫に残すことが第一目的と考えられるのである。

しかし一方で、亜熱帯気候の温暖な島しょ地域にある沖縄は、今までに急速に人口が増加し、資源の消費量も増加している。そのため、資源の節約と再生可能な資源への転換が求められる。また、気候変動による温暖化の影響を受け、沖縄の気候条件も厳しくなっている。



市街地と軍用地の返還

1919年当時、集落はまだまばら。1972年の復帰を境にして、沖縄本島の都市化は急激に進んだことが分かる。わずか数十年で、これほどまで変わらざるとは、だれが予想しただろう